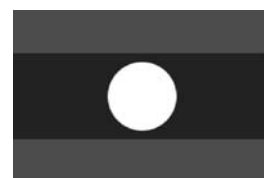


「No Chaos No Laos」



Laos

汐中 義樹

足立区立中島根小学校

- 担当教科：小学校全科
- 実践教科：総合的な学習の時間
- 時間数：3時間
- 対象：小学5年生
- 対象人数：31名

〔1〕授業実践のテーマ・目的

- ・自分の考える「普通」は、世界に目を向けると「普通」ではないのかもしれないということに気づき、ラオスの子どもたちの生活を見聞きし、自分の生活と比較してみる。

〔2〕授業の構成

時限	テーマ、ねらい	方法・内容	使用教材
1	【ラオスってどんな国？調べ編】 ラオスの国について知る。	・インターネットや図書館の本を使い、ラオスの国について自由に調べる。 ・同じテーマ（文化、環境、学校など）について調べている子同士でグルーピングする。	
2	【ラオスってどんな国？発表編】 前時で調べた内容についてグループごとに発表する。	・調べたことを発表用ボードに記載し、全体で発表する。	ホワイトボード
3	【ラオスの子ども、日本の子ども】 前時で調べたラオスの生活から、子どもたちの価値観を想像してみる。	・「今欲しい物は？」などのアンケート結果から、自分たちとラオスの子どもたちとを比較する。	アンケート 写真

〔3〕授業の詳細

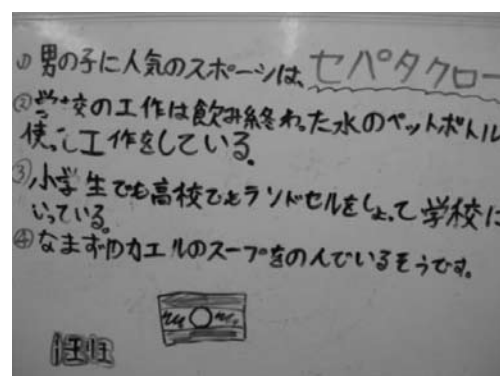
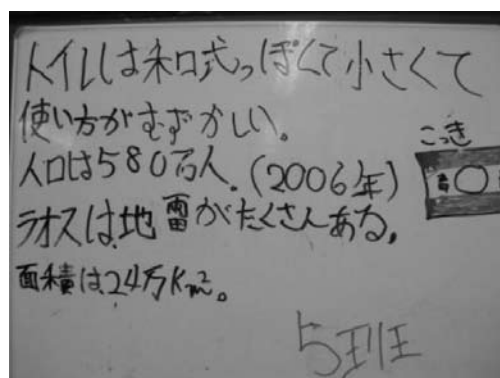
1 時限目：【ラオスってどんな国？調べ編】

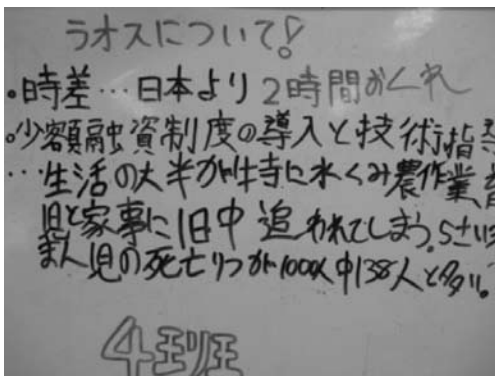
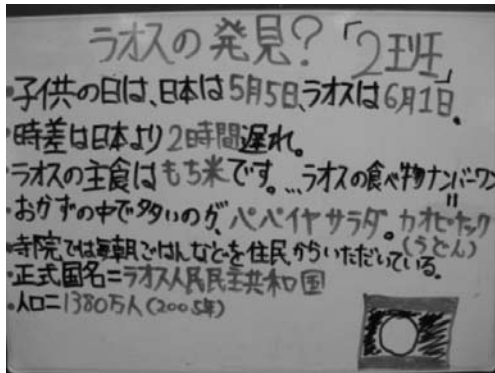
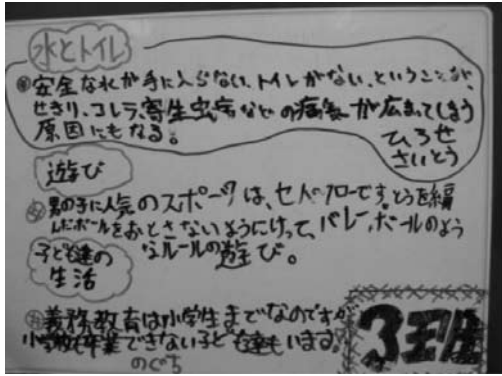
ラオスはどこにあるのか？ラオスの人々はどんな生活をしているのか？等、自分なりに気になったテーマを決定した。同じ様なテーマで調べる子同士でグループを組み、図書室とパソコン室を開放し、自由に調べさせた。

2 時限目：【ラオスってどんな国？発表編】

前時で調べたテーマについて調べた事をホワイトボードに記載して、グループごとに発表した。

その際、自分の中にできたイメージも一緒に発表させた。また、間違った情報についてはこちらで訂正しながら発表をさせた。





児童の意見

- ラオスは貧しい国であり、子ども達は学校に行く事もままならない。
- もち米を食べて生活している。農業が生活の大半を占めている。
- 小学校を卒業できない子が多い。

3時限目：【ラオスの子ども、日本の子ども】

2時限目までで、ラオスについて「貧しい=かわいそう」というイメージが子どもたちの中にできており、「貧しい国の人々は、夢も希望もなく、ただその日を生きていくので精一杯なのではないだろうか」といったような考えに対して、3時限目では、逆転現象を起こそうと考えた。

日本の子どもたちに事前に「欲しい物は?」「夢は?」といったアンケートをとっておいた。「欲しい物」という質問に対しては「ゲーム」や「お金」などの答えが多かった。そして、「夢」をしっかりと持つ子もいる一方で、将来の「夢」がまだ見つからない子も多くいる。

「ラオスの子は同じ質問に対してどのように答えているのか?」を考えさせた。

子どもたちからは、「食べ物・お金」といった予想が多く出てきた。その後、ラオスでとったアンケートを提示すると、子どもたちは意外な答えに驚いていた。

【ラオスでとったアンケートの結果】

- ラオスの子、97人に聞きました!
- ①今欲しい物はなんですか?
 - ・勉強するための道具(ノート、教科書) 64人
 - ・遊び道具 17人
 - ・義務教育以上の教育を受ける機会 16人
 - ②最近親に叱られましたか?
 - ・言うことを聞かない 37人
 - ・遊んでばかりいる 31人
 - ・勉強しない 9人
 - ・家事を手伝わない 7人
 - ・その他 13人
 - ③将来の夢は何ですか?
 - ・教師 27人
 - ・軍人 15人
 - ・ビジネスマン 8人
 - ・軍の幹部 6人
 - ・コンピュータ関係 2人
 - ・銀行員 2人
 - ・医者 17人
 - ・警察 11人
 - ・会計士 7人
 - ・議員 3人
 - ・美容師 2人
 - ・科学者 2人
 - ④一番うれしかったことは何ですか?
 - ・誕生日などの特別なプレゼント 22人
 - ・成績が良かったときに買ってもらったもの 17人
 - ・両親からの愛情 17人
 - ・両親と一緒に暮らせること 11人
 - ・良い成績が取れたこと 8人
 - ・親に優しくされたこと 7人
 - ・学校へ行けること 6人
 - ・その他 11人
 - ⑤あなたの人生で一番大切なものは何ですか?
 - ・親と一緒に住み、学校に行けること 97人(100%)

【ラオスの子どもたちの写真】



子どもたちは「貧しい」と聞くと、「貧しい→物が無い→不幸」といった想起をする子が多い。しかしラオスの子のアンケートを見る限り、彼らには夢もあるし、希望もある。ゲームを欲しがる日本の子と、しっかりと夢を持っているラオスの子。日本の子どもたちの中にある「貧しさ」の概念を考え直す機会にしたいと考え、以下のような話をした。

「『貧しい』と聞くと、私たち日本人はすぐに同情的になる。でもラオスの子のアンケートを見て分かると思うけれど、彼らは決して貧しくなれない。食べるものもあり、夢もある。あれもこれもと欲しい物がたくさんある欲張りな私たちの方が、実はもしかしたら『貧しい』部分もあるのかもしれない。

私たちが普段何気なく『普通』だと思っている事

でも、ラオスの子たちにとっては『普通』ではないこともある。逆に、ラオスの子たちが『普通』に思っている事でも、私たち日本人にとっては『普通』ではないこともある。

少しでいい。自分達の生活の『普通』について考えてみよう。私たちの『普通』の生活の中には、『普通じゃない幸せ』が本当はいっぱいあるはず。それに気付くことができたなら、それはすごく『幸せな事』なのかもしれない。

先生が家で奥さんの料理にケチつけて奥さんに怒られるのも、空手の先輩の文句を言えるのも、実は満たされた生活を過ごせているからできる事なのだろうな、と思う。

これからもみんなと一緒に、普通の生活の中にある『普通じゃない幸せ』を見つけていきたい。」

〔4〕授業実践を終えて

教員になって最初に思ったことが、「今の子ども達は満たされている」ということだった。彼らの不満や悩みについて考えさせられる事が多かった。

ペルーに行った際、平日の昼間から小学生くらいの子がみやげ物をもって寄ってくる。その子たちに対して僕が最初に抱いた感情が「かわいそう」だった。しかし、帰国後にペルーの自殺率がとても低いという話を聞いて驚いた。年間3万人以上が自殺によって命を絶つ日本と、自殺率をはるかに低いペルー。その現実を目の当たりにして、自分にはもっと気付かなければならない事がたくさんあると思った。

今回訪れたラオスでは、かつて抱いた感情が蘇り、日本の子どもたちに伝えたい事が明確に頭に浮かんできた。

今回の授業実践を通して、私が伝えたかったテーマを全ての子どもたちに伝えられたとは思わない。これからの彼らとの生活の中で、まだまだ気付かせるべき事がたくさんあるし、自分自身も学ぶべき事がたくさんあると思っているが、今回の研修で「ラオス」を学んだことは、子どもたちと共に、私自身にとっても普段の何気ない生活を見つめ直すいい機会になったことは間違いない。今回の経験や実践を今後も活かしていきたい。